

派懷疑論は、ストアの教えに対し「反対のことを教える *deleō*」ものであるが、プラトンの教え或いは新プラトン主義からは区別され、その本来の教えを懷疑によって「覆い隠した」ものとして規定される。従って『ホルテンシウス』と「プラトン派の書物」との対置は、キケロによって灯された知恵への愛がこの偉大なラテン作家の名から想定されるストア的、アカデミア派的思考形式から今や離れて、新しい知の枠組みへと昇華していくことを予示するものと言える。

無論、アウグスティヌスは、聖書こそが真の救済を約束するものであるとして、キリスト教信仰に対する新プラトン主義の限界性を認める。但しこれは、新プラトン主義を退けるものではなく、聖書こそが「プラトン派の書物」の不足を補い、救済という究極的な目的を導入することによっていわば適切な方向づけをそれと与えるということを示すものである。このような観念は既に初期の著作『真の宗教』にも見出されるものであった。

構造論的観点から言えば、これによってマニ教からの離反は、マニ教という「理性的キリスト教」の放棄と土着的で素朴なキリスト教への回帰としてではなく、むしろより「理性的で哲学的な」思想としてのニカエア・キリスト教の「再」発見として読まれることが可能となるのである。

キリスト教教義の視覚化とその受容

細田 あや子

多種多様な宗教図像の内容に即してその特徴をみてみると、神や超越者、宗教上の(重要)人物についての図像(神像、仏像、教祖の伝記など)、宗教文書に基づいた図像、宗教の教えや教義についての図像、シンボル、幾何学的な形体といったものに大きく分けられる。これらのうち本発表では教義の図像として、キリスト教教義のなかの三位一体の表象イメージを取り上げ、それがどのように視覚化されているか、いくつかの代表的な図像タイプをおさえながらみてゆく。さらに図像のヴァリエーションを考察するなかで、中世ドイツの幻視者ヒルデガルト・フォン・ビンゲン(一〇九八—一七九)のヴィジョンにあらわれる三位一体の図像に注目し、この教義がどのように受容されていたかという点についても考えてゆきたい。

「恩寵の座」とよばれるタイプのものは、父なる神が処刑されたわが子イエスを十字架ごと胸に抱きかかえる図像である。父の口から鳩が出ているものもあり、聖霊が父と子を結びつける役割を果たしていることが見て取れる。この三位一体の図像において、子の位格を十字架にかけられた者として表現するのは、イエスの受難を経たあとでなくては救済史の成就是ありえないという教義を明確にするためと考えられる。

ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの幻視著作のなかの『スキヴィアス』(第二部幻視二)に、三位一体のヴィジョンが見い

だされ、その図像は写本挿絵としてのこされている。装飾模様の枠に縁取りされた四角のなかに、銀色と金色の二重の円があり、その中央にブルー一色で塗られた人物が両の手のひらを前に出して直立している。ヒルデガルトの幻視に基づき銀色の光と紅い(金色)炎がブルーの人物を囲むような円となっており、これが父、聖霊、子の三位一体を示す。子であるキリストだけが人物像として描出されており、神と聖霊のペルソナは人格化(擬人化)されずに光と炎の充滿として体験される。キリストのみ人物として表し、なぜ神を人物像として描写せず銀色の光の円(聖霊は金色・紅色)としたのかということは、神の描写に関する図像学において特異であるが、これは『スキヴィアス』全体の構想、構成をあわせて考える必要がある。この三位一体のモチーフは他のヴィジョンにも見いだされ、この前の箇所では明るく照り輝き火炎は、全能の生ける神であり、生き生きとしており初めと終わりがなく分割しえない、消滅することがないといわれている。このようにヒルデガルトのヴィジョンに特有の神のとらえ方があり、それが視覚化されているのである。

三位一体という教義に女性性もしくは母性は含意されていないと思われるが、これが視覚化された場合、他のモチーフとの組み合わせなどによって本来の教義にさまざまな解釈が加えられ、女性性のイメージが読み取れる場合もある。たとえば「シユラインの聖母子像」という彫刻があるが、そのなかにイエスを抱く聖母マリアの体内に「恩寵の座」が内包されているものがある。そこからは、マリアの身体をとおして受肉と三位

一体が具現化されているとみなすことができ、三位一体のみならずキリスト教の救済史全体が表現されていると解釈できる。また三位一体と聖母の戴冠とが結合した図像もあり、図像化によって三位一体に対する受容、解釈がより具体的になっている例もある。さらに、三位一体とピエタとの組み合わせもあり、神のひとり子の死を悲しむ父という内容が前面に出ている作例もある。さまざまな図像の作例をみてゆくなら、教義の視覚化が教義の解釈の歴史であるということができであろう。

愛の観想

——サン・ヴィクトール学派における交わりの神学——

中村 秀樹

十二世紀西ヨーロッパにおいて、キリスト教信仰の捉え直しを試みた霊的共同体の一つにパリのサン・ヴィクトール修道院がある。当時の最も優れた教育機関の一つであったその付設学校の代表的神学者フーゴー(Hugo de Sancto Victore 一一四一年没)と後継者リカルドゥス(Richardus de Sancto Victore 一一七三年没)の根本的問題関心は、歴史における神自身による救済の理解として信仰を反省的に捉えること、信仰とその理解の基盤である聖書の読解を方法論的考察と共に徹底すること、そして愛における信仰の実りを重視することにある。その思想は十二世紀の知的・宗教的状况の中でのキリスト教神学の自己確認であると同時に、キリスト教信仰が開く交わりについ